

<書評と紹介> ナヤン・チャンダ著友田錫・ 滝上広水訳：『グローバリゼーション人類 5万年のドラマ』

Nomura, Kazuo / 野村, 一夫

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大原社会問題研究所雑誌 / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

616

(開始ページ / Start Page)

79

(終了ページ / End Page)

80

(発行年 / Year)

2010-02-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007451>

ナヤン・チャンダ著
友田錫・滝上広水訳

『グローバリゼーション
人類5万年のドラマ』

評者：野村 一夫

現代の社会研究においてグローバリゼーションの問題は無視できなくなっている。社会学においても、これは真剣に取り組むべき課題とされている。たとえば、ウルリヒ・ベックは従来の社会学が国民国家を「全体社会」とみなして研究してきた限界を問い、それを「コンテナ理論」と呼んでいる。「コンテナ」とは国民国家のことである。たしかに社会学はこれまで事実上、国民国家の枠（コンテナ）の中で議論を行ってきた。せいぜい数カ国間の国際比較が関の山であったと言えよう。

そうした批判に応える形でアンソニー・ギデンズが標準的テキスト『社会学』（現在は第六版、邦訳は第五版）において、すべての章でグローバリゼーションの視点を導入している例があるが、多くの概説書は「ひとつのトピック」としてグローバリゼーションをあつかうにとどまっている。『グローバル・ソシオロジー』というテキストも出ているが、これは逆にグローバリゼーションに焦点を当てることによって、従来の社会学的知識との接続が不明確になっている。国際学社会学版という感じである。

そもそもグローバリゼーションは、たんに世界中の相互依存性が高まっているという事態以上のものである。それには、そこにいたるまで

の「本源的蓄積」というものが考えられるのであって、「歴史」つまり「世界史」をふくんでいるのである。ここに大きな困難がある。たとえば社会学がグローバリゼーションの問題を適切に扱おうとすれば、世界史を大幅に導入しなければならない。だからこそ、イマヌエル・ウォーラステインのような人は、社会学というディシプリンにこだわることをやめ、「ひとつの史的社会科学」への転換と統合を促すのである。しかし、ウォーラステインの大前提は、グローバリゼーションが近代になって生じたことみなす見解である。それはそれで見識であるとも言えるのだが、ハンチントンのように「文明」を単位にして世界を見るような視点に立つと、それにはたくさんの留保条件がつくのであって、マイケル・マンが果敢に挑戦しているように、少なくともいったんは、もっと長いスパンで世界史の全体を把握していかなければならないと思うのである。

私が本書に注目するのは、これがもっとも視野の広い本だからである。おそらく通常の歴史研究者には、こういう本は書けないだろう。ほんとうは歴史研究者にこそ期待したいのだ。しかし書いたとしても、かつてのトインビーのように身内（要するに歴史研究者）から集中砲火を浴びるだけだろうとも思う。本書のようなスケールの大きな世界史的グローバリゼーション論がインド出身の国際ジャーナリストによって書かれているのは偶然ではない。

本書は、世界史における七つのストーリーを展開し、最後の三つの章で議論をまとめる構成をとっている。七つのストーリーとは、次のようなものである。

第一のストーリーは、壮大なスケールをもつ。すなわち、氷河期末期にアフリカに居住していた人類が五万年をかけて世界中に定着するプロセスを、最新の遺伝子研究に基づいて描く。こ

れが人類最初のグローバリゼーションだというのである。

第二のストーリーは、貿易の発展の歴史である。ラクダのキャラバンから、帆船・蒸気船・コンテナ船へと運搬手段が発達し、現代の電子商取引にいたる流れの中で、とくに印象的なのは大航海時代以前の非西洋社会間の交易の活発さである。

第三のストーリーは、木綿・コーヒー・マイクロチップという三つのものが、世界の緊密な結びつきを象徴するものとして描かれている。

第四のストーリーは、外国へと旅する布教師たちの世界史的役割を描いている。仏教・キリスト教・イスラム教を世界中に広めた布教師たちだが、かれらは異教徒を改宗させようとして異文化社会に接触し、平和的か暴力的に交流を進めたのである。その結果として、世界の距離を縮めたのだ。

第五のストーリーは、カルタゴのハンノをはじめとして、イブン・バトゥータやマルコ・ポーロそしてマゼランへと連なる冒険者たちの系譜をたどる。この場合、原動力となるのが好奇心である。強烈な好奇心が異なる社会を結びつける。現在では移民や旅行者の役割も強調される。

第六のストーリーは、世界制覇を目指す権力と軍隊が、異国に侵入し支配することによって、多様な遺伝子を生み出し、文化を伝播させる。そのような役割を果たすものとして評価されている。

第七のストーリーは、世界を結びつけるものであって、しかもダークサイドに属するものを系譜付けている。すなわち、奴隷と細菌とコンピュータウイルスである。

以上が、七つのストーリーである。おそらくはジャレド・ダイヤモンドのベストセラー『銃・病原菌・鉄』の例にならって、ドキュメ

ンタリー・タッチで書かれているので、少しヘヴィではあるが一種の読み物としてあつかうことができる。その点では、あたかも『銃・病原菌・鉄』の続編のようだ。換言すると、細かい実証がどうのこうのというような読み方をする本ではない。要するに、グローバリゼーションを考えるためには、本書のように、なによりもマクロに人類史を「眺める」行為が必要なのだと思う。

著者は、最後の三章で、グローバリゼーションという概念のたどった意味の系譜を説明し、その概念と現象に対して「ノー」と言う人たちの思想を説明する。グローバリゼーションが、その速度を速め、速めすぎたために、多くの人びとをおきざりにしており、そこから「ノー」という声生まれ、危機意識が生じることである。この危機意識は著者にも共有されているようで、グローバリゼーションの結果として「超結合世界」(ハイパー・コネクテッド・ワールド)が現出していることをしっかりと認識すべきだと結論づけている。

社会科学も歴史学も、些末な縄張り争いに執着している場合ではなく、本書が示唆するようなグローバリゼーションの壮大な潮流に対して、マクロに把握することを目指すべきだろうと思う。そして、協働して新たな「グランド・セオリー」の構築を指向するべきではないだろうか。それが本書を通読したのちの率直な感想である。

(ナヤン・チャンダ著、友田錫・滝上広水訳『グローバリゼーション 人類5万年のドラマ』(上、下) NTT出版、2009年2月(上)、2009年3月(下)、上巻354頁、下巻280頁、定価 上巻2,730円、下巻2,520円)

(のむら・かずお 国学院大学経済学部教授)